

書評『紅衛兵の時代』

張承志 作／小島晋治・田所竹彦 訳
岩波新書1992年4月



藤重典子

この本は私には読みにくかった。

途中でやめて再び読み返し、数人に感想を聞いたが、面白かったという人と無関心な人との二極分解しているようだった。私自身も結論から言えば張承志には共感できないが、ここで取り上げる理由は、著者の破れかぶれのような半ば居直りのような紅衛兵体験の記述に反発を感じつつも、新たな問いを突きつけられたような気がしたからである。

小島晋治氏は解説で、この文章が疑問——暴行・破壊・武闘などで伝えられる紅衛兵の姿と、映画で見た爽やかなその形象との断層に対する——をかなりの程度埋めてくれたと述べている。確かにこの文章は文革の狂乱の日々に生きた若者を、不可解な怪物ではなく一個の生きた人間として感じさせてくれるものであり、それは私にとって驚きに近かった。「禁じられた遊び」を毛沢東の許可で思いきり遊んだ子供たちの解放感にも共鳴できる部分がある。

さらに、率直になりきることで紅衛兵運動を救おうとする著者の意図の強さは、図らずして批判の深さを生み出しているように思われる。その中でも際だつのが「血統論」に対する批判である。陳凱歌の『紅衛兵の時代』は紅衛兵運動に対する痛烈な告発が記されているが、血統論を振りかざす紅衛兵たちに対しては「……父親の功績を誇り、生まれながらの革命家を自任したのだ。立派な血筋に生まれ、思想は純粋なのだから、国家の大任を果たすのは当然だと思ひ込み、輝かしい功績に強く憧れていた」「……この生気にあふれ、自負に目がくらみ、功を焦って挑発的だった危険な勢力……」（刈間文俊訳、講談社現代新書90年6月、49-50頁）と述べている。

これに対し張承志は別の一面をも提示する。

「反体制の種がわれわれの心の中に根を下ろし始めるのと同時に、『革命第二世代』の責任感がだんだんと優越感に変化しつつあった。一部の高級幹部の子女の場合は、それらがさらに特権思想へと変化しつつあった。」（30頁）

「清華付中の三分の一を占めていた高級幹部の子弟たちは、天馬空を行くがごとき毛主席の革命を求める呼びかけを聞くにつれ、自分たちが特別の優遇を受けていないことに不満を感じた。」（35頁）

「われわれは、血統論がもたらし、いながらにして手にすることができる、この自明の巨大な利益を放棄できるだろうか？ゼロの地点にもどって、犬っころ同然の普通の学生、生徒になることができるだろうか？

清華附中紅衛兵はこのように鋭く自らに問いかけることができなかつたのだ。

—やはりわれわれに対する歡呼、賞賛、崇拝を享受する方が楽だ。『全人類の解放』を軽やかにわれわれが私有する流行の旗じるしに変えてしまう方がより快適だつたのだ。」(87頁)

さらに張が「今になってこの部分を読むと気分が悪くなり吐き気がする」と言いながら引用するのは、清華附中紅衛兵の書いた造反論の中の下りである。

「われわれは左派の造反だけを許し、右派の造反を許さない。君たちがあえて造反しようとするなら、われわれは即刻弾圧する。これがわれわれの論理だ。どのみち国家機関はわが手中にあるのだ。」(83頁)

紅衛兵をつき動かしていた血統論に自負や誇りを読み取る陳凱歌に比べ、利益や支配者意識まで読み取る張承志の言葉は激しい。

張の挙げる側面から見てみると、紅衛兵運動は革命第二世代の権力争い——ポスト毛沢東をめぐる——とも呼べよう。父は革命の実績によってランク付けされ、高い地位についた。だから自分も高い地位につくことを正当化するための革命的状況と、その中での自己の優越性の証明が欲しいのである。

「私たちは先を争って極端な観点に立とうとした。」(42頁)

そしてそれは支配者毛沢東の意を察し、争って満たすことによってひいきを得ようとする忠誠合戦でもあつた。

「……だから『造反』のインスピレーションも勇敢さも、直接的には決して私たち紅衛兵から出たものではなかつた。

そういうわけで、そもそも紅衛兵誕生以前から、私たちの世代の若者は一種の二面性を持つ存在だつた。つまり体制と人間を束縛する教育への造反者でありながら、特権階級のある種の暗示も受けていたのだつた。」(38頁)

「しかし、ここで私たちの運動を分析してみるべき点がある。私たち造反派の中には高級幹部の家庭の出身者がおり、彼らは造反を選択する前に、すでに中共中央の文化大革命を進める決定を親から聞いていたかもしれない。つまり彼らは中共中央北京市委員会の命運が尽きていたこと、清華附中当局の命も旦夕に迫っていることをすでに察していたのだ。彼らの選択には行きつく果てについての暗示や、特権が養成した知恵、漠然として形の定まらぬ欲望が潜んでいた。たとえ彼らがこの選択にさいして多くの危険を冒したにせよ、それは真の意味において自らを犠牲にすることを覚悟したものではなかつた。」(43頁)

だが風向きを察した上での「造反」や毛沢東忠誠は誰にでもできる。だからこそ「血統論」は、他者を無条件に排除できる不可欠の理論であり、単なる彼らの認識上の欠陥や前近代的偏見ではないだろう。また紅衛兵同士の激しい武闘や、遇羅克——血統論を批判して銃殺にされた——への憎悪も、彼らが権力の座から引きずり下ろされることへの怒りや恐怖を根底に持っていたことを念頭に置いたほうがより理解しやすいものだ。

このような紅衛兵たちの「汚れ」を批判し、毛沢東の「詩人の反逆精神」を今もって信じようとしている張承志はナイーヴ派と呼べるだろう。彼にとっての最高の価値は心情倫理を貫くことにあるようで、それは六八年夏に至るまで清華付中紅衛兵三百名のうちただ一人の高校生として中学生たちを率いて武闘に残るという選択や、「信仰を衣服のように気楽に脱ぎ捨てる多くの中国人のあとを追いたくない」という言葉にも見て取れる。ただしその彼も自己の精神の安定を保つためにしたたかな思考停止をしている部分もあるし、“言及しない”という形の最も巧妙につかれた嘘もあるだろう。特に市民生活の大規模な破壊は文革に対する否定的評価の最も強い社会基盤である。張承志が実際に関わったどうかは別にして、もしそれに言及していたらこの回想録はもっと否定的印象を与えるものになっていただろう。そしてこの文章は失われた人々の生活や生命よりも自己の優越感やナルシズムを上に乗けるといふ、恐るべき———というか、「困った」というか———純粹さを「結果として」持っていると思う。

彼の血統論に対する怒りは強い。それは「一人の作家として、すでに発表し、またこれから書こうと思っている私のすべての文章は、すべて極悪非道の血統論に対する戦いとなる宿命を負っている」(103頁)とまで述べさせる。なおかつ彼は紅衛兵運動を弁護し続ける。その選択は彼の経歴によるものが大きいだろう。

彼は述べる。

「私はずっと革命第二世代を自任し、わが家が革命家庭であることを誇りにしていた。」(19頁)

しかし幼くして父親を亡くし、下級事務員の母に育てられて貧しい少年時代を送った彼は小学校の頃から官僚の子弟の享受する特権的生活を憎んできた。そして張承志の家庭状況は、高級幹部の子弟に指導された紅衛兵組織における彼の地位の低さと関係しているだろう。陳凱歌は四中の紅衛兵について、「たとえ幹部の子弟であっても、親の地位がそれほど高くない者は入れてもらえなかった」(86頁)と述べているが、張承志が清華付中の紅衛兵結成メンバーで

ありながらリーダーではなかったがゆえに全体情報にはうとく、方針決定の場にはいなかったことが随所からうかがわれる。しかしそれによる精神的空虚感やルサンチマンを十分に補ったのは「紅衛兵」命名者としての自負であった。

「紅衛兵」の名が採用されたときの気持ちを彼はこう述べている。

「私はまっかになり、頭がガンとなった。私がたまたま思いついたこの名称が、仲間たちにこのように注目され、愛されるなんて思ってもみなかったのだ。」(53頁)

そして彼は幹部の子弟でないことに自己卑下と恐怖感を感じたある経験を語ったあとに続ける。

「私はあの一瞬だけ恐れ、かつ悩んだが、それ以上のことを考えなかった。なぜなら私は清華付中の最初の紅衛兵の一人で、しかもまさに紅衛兵というこの偉大な名前の作者であったからだ。」(92頁)

全国最初の紅衛兵組織、毛沢東の自筆の支持の手紙をもらった光栄ある組織、その創立メンバー、名付け親等々、彼にはナンバーワンの条件がそろっている。実態は少数派組織の下っ端であったろうが、このゴッドファーザー的自負が彼を紅衛兵の中の精神貴族とさせ、運動を支えていた様々な情念から血統論を引きはがした「純粹紅衛兵」とでもいうべき理念の創造に向かわせるのである。

さて張承志が思考・批判を進めることをためらう分野で主要なものが政治家として、デマゴグとしての毛沢東である。彼のおおまかな主張は「民衆と官僚・特権階級との間の鋭い矛盾」ゆえに、社会に「造反」を企てる紅衛兵は正しかった、そして「造反」を核とする毛沢東の「詩人の反逆精神」は正しいというものである。

六十年代に入ると「大躍進の奇跡」創造に失敗し地に墜ちたカリスマである毛沢東は経済問題からは撤退せざるをえなかった。そして毛はその失敗のいわば尻ぬぐいである経済調整政策を行う劉少奇らの権威確立を恐れ、「紅軍の伝統」「抗日戦勝利の功績」のイデオロギー戦略から手をつけ、思春期にいた張承志の世代の精神はそれに染め上げられる。革命功労者の株——自分を最高位に置くことができる——を空前まで上げたのは毛沢東であり、そこから血統論までの距離は遠くはないし、それは革命の功績で権力についた者の専横を助長する役割も果たしたことだろう。また、劉少奇に見て取れるのは「腐敗した官僚特権階級」と言うよりも、専門的知識を持った職務に忠実に励む近代的官僚の姿である。それゆえに毛沢東は劉を憎み、「官僚」の名のもとにそれらを混同させ打倒目標にすることに成功したと言える。さらに、建国後いち早く官僚

主義の弊害に気付き、内部からそれを改革しようとした人々を反右派闘争で根こそぎ弾圧したのも毛沢東本人なのである。

そして張承志は“毛沢東は紅衛兵に団結の必要を説いた”“江青は血統論を批判した”と、血統論批判者としての文革推進派を見いだそうとする。しかしそれは単に彼らの置かれていた立場から説明できるものではないだろうか。毛沢東ファシズムの尖兵である子供たちが内ゲバをしているようでは困るし、味方は多い方がよいのである。中央文革小組が「井岡山」を支持したのは、それが「大きい」からではないか。(137頁)

さらに既存体制への反逆という新たな形式をとりつつも、最高指導者に恩顧と慈愛を求める態度は、社会組織や規範への従属を恣意的個人に置き換えたものであり、実際は更なる昔返りと言えるものだ。毛沢東像が崩れた途端に崩れ落ちる没主体的態度であるがゆえに、毛は聖域に置かれ続けるのである。

さて、張承志は六八年夏以降のモンゴル草原での紅衛兵の奮闘——小学校の創設、井戸掘り、医療など——を誇りをこめて描いている。私はこの記述に好感を持つのであるが、この部分と比較したくなるのが六四年に大学入試をあきらめよう説得され、辺境で農業生産に励んだ「出身の悪い」若者についての張承志の言及である。

「興味深いのは、彼らの多くがこれを不満とせず、農村で自信に満ちて働き続け、その中から全国に名を知られた模範的人物を輩出したことである。理想主義と奴隷主義がないまぜになっていた一時期といえよう。これらの人々の奮闘が、問題の裏に潜む暗黒面を覆い隠した。」(25頁)

この言葉は彼自身にはね返ってこないのだろうか？

モンゴル草原での労働体験が活力に満ちた意義あるものとして感じられたというのは嘘ではないと思う。

高校までの教育を受け、後に大学にすんなりと入った張承志は、初等中等教育を文革で破壊された世代の苦悩はない。生きる意味を感じていた職業から引き離される苦痛も、配偶者や子供と別れる悲しみもないし、貧困な革命家庭であった彼の家は略奪された形勢もないようで、幼時からの愛着ある品々が破壊される心の傷もない。身体は頑健そのもので、医療を受けられないという苦痛もなかったようだ。文革を迎えるには失うものが最も少ないラッキーな世代だったといえる。

もちろん様々な排除や裏切りにもあっているし、飢えも経験したことだろう。しかし獄中での態度に見られるように、彼は抑圧をはねかえす強靱な精神力を

持っており、その自己愛は弱い逆境にある自分を哀れむよりも、強い自分を誇る方向へと向かう。それは彼の最大の魅力であるといえる。

この文章創作の動機について作者は次のように述べている。

「今、私は一人の作家であるが故に、立ち上がって清華附中紅衛兵のために、少なくとも私自身が創作したこの文字のために、何かを語らざるを得ない。だがそうでなければ私は永遠に沈黙を守ったであろう。なぜなら、当時の北京、すなわち一九六六年七月の北京は、もはや一個人が自分の体験によって掌握できる世界ではなかった。当事者はすべてを信ずることはできない。同時代の歴史は研究できない——私はこの真理を承知している。」（78頁）

彼は「恐怖に近い心情」さえ抱きつつ（72頁）、紅衛兵運動を弁護する。その彼をつき動かす情念については私には理解しきれないのだが、熱狂、冷静、嫌悪など著述を進める作者の心の動きは伝わってくる。そして彼は運動の後のさまよえる心をジャプリーヤ教で救済した。この精神的逃げ場がなければ負いきれぬほどの歴史であるだろう。

毛沢東・紅衛兵・文革に対する賛美から嘲罵へと、世の趨勢は、少なくとも知識人の間での流行は変化した。小島氏はこれを「断層」と呼んだ。刈間氏は陳凱歌の『私の紅衛兵時代』あとがきでもこの変化にふれて「破壊の悲惨さを訴えれば訴えるほど、注がれる同情の涙の陰で、何かが歴史の襲のなかに巧妙に埋め込まれていく」と述べている。

文革終結直後には自分の受けた暴力に対する告発が最大の衝撃力と新鮮さを持っていた。それは「反権力」であったが、やがて流行することによって「権威」と化し始める。肉体的苦痛は忘れられても精神的苦痛は鮮やかに蘇るから、書くことはなお決して容易ではないだろう。しかしながら繰り返されるテーマは飽きられる。それから十年二十年の歳月を経ながらなお「被害者の正義」の有無を言わせぬ説得力に安住し続ける者にはどうしてもうさんくささがただよいはじめるのである。加害者も悪魔ではないし、被害者も聖人ではない。読者はどちらも長短や善悪を備えた生身の人間として理解し、それぞれの行為を大義名分として感じられた判断の由来を知りたくなる。そして毛沢東や紅衛兵に対する評価も崇拜と嘲罵という両極端の過程を経た上で、双方を含んだ認識の成熟へと向かうのかもしれない。

ゆえにこの文章はアナクロとも呼べるほどの毛崇拜の尾をひきずりつつも、あるいはその挑発性ゆえに、新たな認識を切り開く可能性を持ったもの、と言えるかもしれない。